

魔法の宿題 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：阿保孝志郎 所属：青森県立浪岡養護学校 記録日：平成28年 2月26日

○キーワード : 学びと学校へ向かい合うために

「ADHD」読み・書きの困難」「社会生活」「不登校・遠隔授業」

【対象生徒の情報】

○学年 中学部2年

○障害名 注意欠如多動性障害 自閉症

○障害と困難の内容

- ・知的な遅れは見られないが、一方的に話すなどコミュニケーションに課題がある。
- ・自分が納得できる説明がないと行動に移すことが難しい。
- ・苦手意識があることに対して、行動することに強い抵抗を示す。
- ・思い通りにならないとかんしゃくや他害行動などのパニック等の不適応行動を起こす。

【活動進捗】

○当初のねらい（計画書の学習目標）と活動による方向性の確認状況

- ・遠隔授業をすることで集団活動に慣れ、ルールやマナーを学ぶとともに、登校への意欲喚起を図る。
- ・家事都合による欠席時の学習を保障し、学習習慣や態度を形成する。
- ・朝の会からの授業参加を定着させ、基本的な生活習慣の確立を図る。

○実施機関 平成27年4月～平成28年2月

○実施者 阿保 孝志郎

○実施者と対象生徒との関係 学級担任

【活動内容と対象生徒の変化】

○対象生徒の事前の状況

- ・集団生活に不慣れである。
- ・登校して授業を受けた経験がほとんどない。
- ・学習への不安やどうせできないという気持ちが強く、学習に取り組むことが難しい。
- ・苦手意識があることや不安なことに対して、強い抵抗を示し、衝動的である。
- ・パニックになると、大声で叫びながら校内を走り回る事が多い。
- ・生活が不規則なため、登校は午後が多い。

○活動の具体的内容（iPadのビデオ通話で遠隔授業を実施）

①学習に参加するために「FaceTime」「Tango」の活用

②学習の共有するために「MetamojiShare」「OneNote」「カメラ」「Skitch」「写真」の活用

③スケジュールの共有のために「iMessage」「LINE」の活用



○遠隔授業を行うまでのプロセスについて

| | 学級担任のはたらきかけ | 対象生徒の行動や気持ちの変化 |
|--------|--|--|
| H26年7月 | ○登校した際に iPhone や iPad 持ってきたので学習に使えるかと思い AppleID を聞く。 | |
| H27年1月 | ○保護者から対象生徒の気持ちが学校に向いていないということを告げられ、気持ちを学校に向けることをねらい、対象生徒と直接やりとりができる Facetime を活用することを提案した。 | ○学校に行くのは面倒だが、学校での活動内容は気になるので関心を持った。 |
| 2月 | ○週1回程度、学級活動の時間に Facetime を活用して学級との交流や遠隔でも参加できるゲームを実施した。 | ○笑顔で交流に参加する様子が見られ、「次はいつ」と聞いてきたり、興味がある活動の時には「僕もやりたい」と言うことが増える（実際に登校に発展することがなかった）。 |
| 3月 | ○学級活動に加え、儀式的行事の参加を試みる <ul style="list-style-type: none"> ・卒業生を送る会を中継する ・卒業式を中継する ○iPhone だけでなく、iPad での Facetime の設定と学校で用意した AppleID のアカウントの設定等を遠隔で実施（この活動から遠隔で授業の可能性を感じる）。 ○個別指導の時間を設定し、Facetime で勉強することを提案する。 ○年度末の懇談で保護者にも提案し、快諾して貰った。 | ○送る会を楽しみ、卒業生におめでとうと言うことができ、「参加できてよかった」と話していた。 ○卒業式に興味はないが式中、画面の前にいることができた（話を聞くことに慣れてきた）。 ○興味のある iPhone・iPad の設定を通して、担任とのやりとりを受け入れることができた。 ○学習意欲に欠ける面が見られるが、担任や学校と繋がる時間が楽しくなってきたので受け入れる。 |

○他のクラスメートの反応について

他のクラスメートは、対象生徒の家が遠いことや体調不良でよく欠席していることから疑問に思う生徒が少なかったこと、ビデオメッセージ的な活動をしていたこと、ベッドサイドの生徒との遠隔でのやり取りの経験があることなどからそれほど違和感なく受け入れた。

○対象生徒の事後の変化 (iPadのビデオ通話で遠隔授業を実施)

「Facetime」や「Tango」を使い、朝の会、帰りの会、生活単元学習、学級活動、総合的な学習の時間での話し合い活動の学習場面で実施した。

(ア)話し合い活動に参加し、ルールやマナーを習得

- ・ 授業の前に本人が伝えたい話をじっくりと聞いてから授業を始めたところ担任の話(提案)を聞くようになった。
- ・ 日常的につながっていることで学校を身近に感じ、担任や友達とのやりとりを楽しみに参加する様子が見られた。
- ・ 集会等での発表を見て、友達の良い部分についての感想発表をすることが見られた。



図1 遠隔で学部集会へ参加

(イ)数学での活用(プリントを共有した授業)

「Facetime」や「Tango」での遠隔でのやりとりに加え、「MetamojiShare」や「OneNote」を使い、担任とプリントやノートの共有を試みた。これらは双方向で書き込みできるアプリを活用することで家庭にいながらも教室にいるような感覚で授業を受けられることをねらった。

- ・ 担任と一緒にあればプリントに取り組むことができるようになった。
- ・ 「間違わずに確実にできる」ということを支えるため、島根県意東小の井上先生考案の「たしひきものさし」を使うことで、安心して計算問題に取り組むことができるようになった。計算機アプリも使用したが、どんなに簡単な計算でも使う様子が見られ、暗算につなげるため確実にわかるだけでなく、数直線を使って視覚的に数が増減するイメージが持ちやすい「たしひきものさし」を使用することとした。
- ・ 他の生徒と一緒に取り組むことに抵抗感があったので、他の生徒の解いた問題を「たしひきものさし」を使って採点するようにしたところ、他の生徒と一緒にの場面で使用できるようになった。
- ・ 「たしひきものさし」の操作に慣れてくると、他の生徒と一緒にでも自分の問題に取り組むことが増えた。
- ・ 学習意欲があるときは、時間が足りずに終わることができなかった問題を、自分で締め切りを設定し、宿題として取り組むことがあった(2回)。

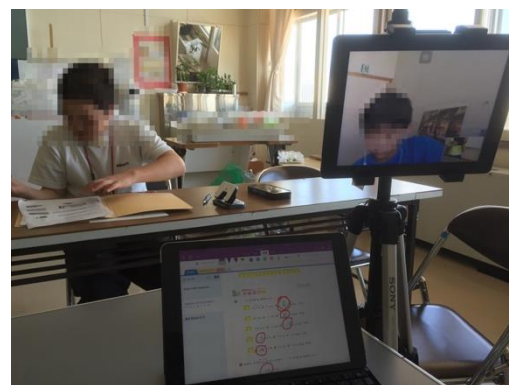
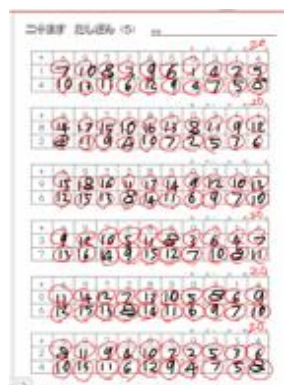
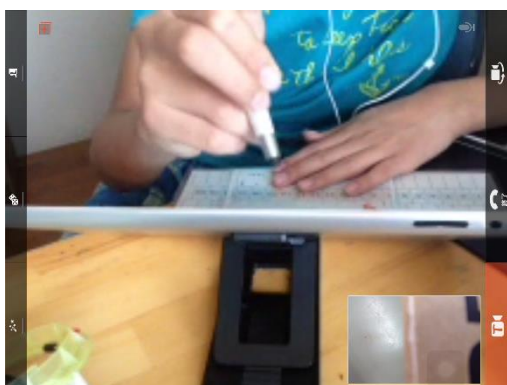


図2 「たしひきものさし」で解く様子

図3 数学のプリント

図4 数学の授業風景(学校)

(ウ) 国語での活用

「Facetime」や「Tango」での遠隔でのやりとりに加え、「MetamojiShare」や「OneNote」を使い、担任とプリントやノートの共有や写真に文字を添付できるアプリ、メッセージアプリを活用して文字を出力することをねらった。

- ・ 一画ずつ書き順を提示し、きれいに書けるポイントを伝えながら一緒に書いたことで、苦手だったひらがなを書くことができた。
- ・ 絵描き歌を行った後に、画面を拡大して名前の漢字を一画ずつ真似させ、すべて書き終えた後に画面を縮小させることで勉強を意識せずに自分の名前の漢字を書くことができた。一度書くことができてからは、何度も書いて自慢するようになった。
- ・ 自分の部屋に置いてあるお気に入りのコレクションを写真に撮り、「Skitch」で写真の上に文字を入力して自慢コーナーを作ることができた。
- ・ 予定を質問したり、休日の様子を伝えたりするようになった。



図5 書いた名前を自慢する様子

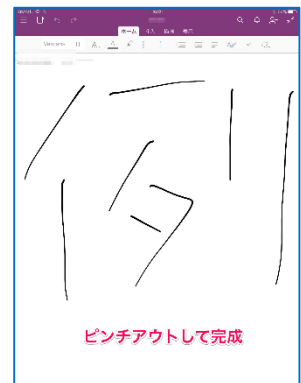


図6・7 名前の漢字を書いていると思わせないで書かせた工夫



図8 コレクション自慢の写真



図9 コレクション自慢コーナー



図10 Line を活用した写真絵日記

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

- ・ 遠隔であっても日常的に友達や学級担任とやりとりすることで学校や学習に対する安心感や学級への所属感が増し、集団の中で本来の自分の姿を見ることができたのではないかと。
- ・ 長い学習空白から強い不安感があるため、学習するということに対して消極的だったのではないかと。
- ・ 安心できる環境（人、課題、方法）を創り出すことで学びに気持ちを向けることができたのではないかと。

○気づきに関するエビデンス（具体的数値など）

「経験の広がり支える」

- ・ 実際の登校日数は増えていないが、登校と遠隔を合わせた出席状況は約 5.5 倍であり、「学校」や「勉強」が「苦手なこと」から楽しいことへ少しずつ変化しつつある。また、楽しみにしていた活動に参加できない時の泣いて悔しがる様子から、遠隔から登校へ気持ちに変化していると思われる。

「安心感が支える」

- ・ 個別対応できる時間に、授業を繰り返したり確実に解くことができる教材を活用したりしたことで、苦手にしてきた計算問題に主体的に取り組むことができた。
- ・ 苦手さを感じさせないアプローチで、結果的に名前を書くことができたことで自信が芽生え、自分から名前を漢字で書くことができるようになった。
- ・ 送信したメッセージの内容を分析すると、報告から共感へと変わっており、学校や担任に良い印象を持っていることがわかる。

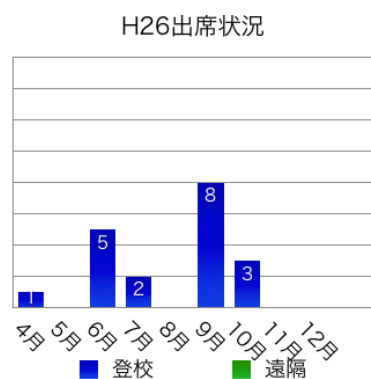


図 11 H26 出席状況



図 12 H27 出席状況



図 13 気持ちの変容

○その他エピソード（画像などを含めて）

- ・ 授業に参加したいという気持ちから、体幹トレーニング（保健体育）に参加できた。
- ・ 他の教員の授業（美術）に参加し、スノードームを作ることができた。
- ・ 担任宛てに、自主的に手書きの年賀状を送ることができた。



図 14 体幹トレーニング



図 15 スノードーム作り



図 16 手書きの年賀状



○今後に向けて

対象生徒と ICT を活用した遠隔授業を行っていく上でもっとも大切にしたいことは人や課題に対する安心感である。対象生徒は、これまでの学習空白や学校など様々なことに対して不安感・不信感を持っていた。安心感を与えるために、授業のスタイルもなるべく勉強を意識しないアプローチで、いつの間にか学習に巻き込み、間違わないことや上手にできるためのツールを使い、安心して学ぶことができることを実感できるように心がけている。また、対象生徒が拒絶したいルール等についても、共感しつつも譲らないようにすることで、納得してから参加するようになってきた。最近は「やるぞ！」という言葉で始められることも増えている。遠隔での取り組みを通じて、ようやく学校生活のスタートラインに立ちつつあると感じる。また、遠隔を通じて、本生徒が求めるものは遠隔ではできない授業や友達とのふれあいに広がっ

てきている。段階的な自立通学に向けた取り組みを含め、本生徒の世界を広げたいと思う。対象生徒と学校のつながっている時間を積み重ねることで、「学校」「学習」＝「苦手なこと」から「楽しいこと」へ変えていきたい。

【今後の取り組みたいこと】

- 美術や作業等の制作活動がある授業の参加の工夫（教材は事前に配布し、学校と同じ授業を実施）。
- 体験的な学習は登校して参加、個別学習は遠隔授業で実施し、1週間通して授業に参加できるようにしていく。
- 授業時間以外にも学習できるように「NHK for school」を活用した授業を実施し、放課後でも自習できるようにしていく。
- 高等部進学を視野に入れ、誰とでも遠隔で学ぶことができるようになること。
- 普段話している言葉を活字化して視覚的に漢字に触れることや、連絡や報告することを通して短文を作る活動を繰り返し、書いたり文字を使って表現したりできるように取り組む。
- 自力通学を視野に入れた段階的な登校の支援を行う。